

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.45)

### 「学ぶことの苦さ、実りの甘さ(2)」

・・・発音は屁の河童だとは言えない・・・

日本人がスペイン語を話すとき、スペイン語の文字をそのままローマ字読みで読んでも、殆ど日本語と同じ様に発音出来るので、文法などと比較しても発音は簡単であるなどと言う人もいる。ある部分では納得できる所があるが、しかし、それも時と場合、単語の内容などにより異なるものである。

語学講座ではないので例えも限られてしまうが、経験した中から幾つか検証しよう。「pelo (頭髮)」「pero (しかし)」「perro (犬)」など、単純に「ペロ」と喋ればよいというものではない。微妙な違いがあって判断が難しい。しかも、易しいからと言って、発音が少しでも違くと、時には誤解を招くときがある。

puedo (プエドと発音)「(私は)～が出来る、・・・しうる」と、pido (ピイドと発音)「(私は)求める、注文する)」と言う二つの単語がある。この二つとも比較的使用する頻度が多く、これが実になやましい。人によっては、これらが pedo (ペドと発音し、「屁・おなら」の意味)と聞こえてしまうようだ。

本人の意思に関係ないものの、前後の脈略の無いまま、「屁・おなら」と発音されては、聞く人は特別に耳障りに聞こえるらしい。そうは言っても、正しく発音しているつもりなので、仕方がないですね。

この「pedo」もメキシコでは「酔う、ラリっている」などと使う人もおり、ボラッチョ氏のように、テキーラを飲みすぎて、酔っ払った者には、益々頭がこんがらかってくるばかりである。

Cafetería(喫茶店)に入ったときのことである。注文にきたウエイトレスに、「Té quiero(お茶が欲しい)・・・」  
「Té テ」の部分をやや強く発音すべきところを、「Tequila (テキーラ)でなくて、Te quiero(テ キエロ)」と、か  
っこつけて洒落を利かしつつ、紅茶を注文したのだが、日本語の発音の癖で、平板な  
アクセントの無い言葉で喋ってしまったのだ。



これでは、「テキーラよりも、君を愛する、あなたを欲しい」となり、彼女の思考回路を一瞬ショート状態にさせてしまった。しかし、「グラシアス(ありがとう)」と、微笑みながら答えてくれた。ヨボヨボ爺の言葉を、外国人の発音の間違いと考えて、軽く聞き流したのだろう。

もう一つ続く。日本へ研修に行ったP氏が、身振り手振りを交えて面白おかしく、次のようなエピソードを語ってくれた。日本女性と知り合ってしばらくして、ムードが高まった頃、彼なりの中南米流の流儀で、公園でキスを仕掛けたという。女性はスペイン語を少しは話せるのだが、男の突然の行動に対して、咄嗟のことで思わず日本語で、「駄目！駄目！」と言ってしまった。

彼はそれを聞くと益々積極的に行動したそうだ。この少し話せるというのが、誤解の元であった。dame(ダメと発音)は親しい人に対する命令形で、「(あなた)、私に頂戴」と言う意味である。

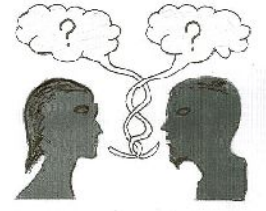
拒否の態度で「駄目」と言っても、相手には拒否と反対の肯定的な言葉となってしまう、彼が勇んでさらに積極的行動を取ろうとしたのも、うなずけるというものだ。その後における進展具合は、どちらの意味が通じて、どうなったかは話してくれなかったので、神のみぞ知るである。

話は突然変わるが、インターネットで日本の参議院選挙結果を見て、驚愕感で何時に無くテキーラの量が

増えてしまい、そのため選挙と発音の連想から、とんでもないチステ(小嘶)を考えてしまった。レッドカードで即退場か？

メキシコ人「一番最近の選挙は何時でしたか?」、日本人「今朝かな!」(〇)

(\* Elección と Erección の意味をとり違えたもの。内容は ción を tion と変えた英語の単語から連想してください。R の発音は、我々には少しばかり難しい)



とにかくにも、会話においては、発音の正確さは勿論、アクセント一つ取っても大事なことがよく分かったが、かように語学を究めるといことは難しいという、当たり前の結論に行き着いてしまう。

大学等で3日間の講義実施終了後、自作の教材や講師に対する評価測定のため、アンケートを実施している。相対的には好評を得ているが、それでも中には、特に語学力に関して、辛辣な意見を出す人もおり、悩みは絶えることなく続くものだ。しかし、ボラッチョ氏は老いたりとはいえ、日本人の矜持を持ち続けたいと思う。これからも講義を何回も控えているが、そんな意見にまけるものか、新たな出会い求めて、「男一匹(この言葉の使い方には抵抗があるが) 今日も行く」の心境である。

見せてはならない心の傷を かくす笑顔に月も輝る

口にやだすまい 昔のことは 水に流して はればれと

仰ぐ夜空も久し振り いいさ涙を抱いた渡り鳥

(「涙を抱いた渡り鳥」(3番) 作詞: 有田めぐみ 作曲: いずみゆたか 歌: 水前寺清子)

社会人になりたての頃に流行った歌が思い出される。……古いねえ、アナクロニズムだね!

そろそろ頁が尽きてきた。前に、おならの話を出したついでに、もう一つ、おならと長寿と外国語上達の相関に関する高尚な?話をして終ることにしよう。鼻はつまんでも、目をつぶらないで読んでいただきたい。

「おなら」に関する珍談・奇談が書いてある、「おなら考」(佐藤清彦著、文春文庫)という本に、次のような記述がある。家康、秀忠、家光などの徳川家将軍に尊崇を受け、100歳以上の天寿を全うした高僧、天海僧正は、あるとき家光に長生きの秘訣を聞かれ、「長命は粗食、正直、日湯、陀羅尼、おりおり御下風遊ばさるべし」と答えたといわれる。

「日湯」は毎日風呂に入れということ、「陀羅尼」は「だらに」とよみ、「梵文の呪文を翻訳しないでそのまま読誦するもの」とのことである。最後の「下風」は遠慮なくおならをすれば健康に良いとのことである。「正直」、「日湯」くらいは実行できそうだが、あとのものはなかなか難しい。

せいぜい、人様に迷惑のかからないところで、「おなら」なども我慢せずに、また「梵文」のかわりにスペイン語の小説を、辞書の助けをかりずに読んで、「へ!へ!へ! スペイン語なんて、屁放り腰で話さないで、堂々と話せば、屁の河童さ」と豪快に笑いとばして、残り少ない人生を楽しく過ごせば、一石二鳥どころか三鳥となろうと言うものだ。 「屁をひっておかしくもなし独り者」(江戸川柳)

今回の便りは、語学の苦労話から脱線して、「屁をひって尻つぼみの、屁のような内容で申し訳ありません。へい!」などと、へいしん(平身)低頭し謝るのみである。今日はテキーラが過ぎたようで……

(2010年7月15日、今週末は、オハカと言う所へ、伝統の民族芸術を見学に行く予定です。)